

生と死

(原文)

角 玲海 (16 歳)

東京都

昭和女子大学附属昭和高等学校

生きて 16 年がたった。朝起きてご飯を食べ、電車に乗り学校へ行き、友人と他愛もない会話や部活をし、家へ帰ってベッドに入り眠る。この繰り返しが行われる日々を、毎日何気なく過ごしていた。この何気なく過ごすことが出来ていた日々が幸せであるということに、当時の私は気づいていなかった。

中学 3 年生の春、父が癌で倒れた。この日を境に私の中の何かが崩れだした気がする。それから、いつもは家にいなかった父がずっと家にいる環境に変わった。何気なく過ごしていた日々の中に、いきなり新しい人が飛び込んできたことによって私の生活の歯車が少しずつズレ始めた。母は父の介護を行わないといけなかったため、私は自分のことを自分で行う機会が今まで以上に増えた。自炊や買い物などを自分で考えて行い始めてから、母親の存在の有り難さを痛いほど実感した。そして環境が変わると、人間は以前の人柄などを想像することが難しいほど変化する。このことに気付かされた。

父は、私が幼少期の頃から単身赴任だったため土日の週末にしか喋る機会がないまま育った。そのため、父親や家族みんなと過ごした休日の思い出はあまりない。そんな私にとって、夏休みに家族で行く海外旅行はとても楽しみかつ、大切にしたいと思う時間だった。旅先では必ずハプニングが起こっていたが、家族という一つの集団としてとても充実して毎年夏を過ごすことができていた。しかし、父が癌になると父はもちろんのこと、母も徐々に精神面が変化していった。父はだんだん体つきが細くなり、自分の意思で行動することや言葉を話せなくなってしまい、それに対して母が父に怒る回数が増えていった。

家族とは一体なんだろう。この問いが、両親が喧嘩をする度に私の中で浮かんでくる様になった。私は家族とは、辛い時は 1 番の見方で話を聞いてくれ、ダメなことはしっかりお互いに指摘しあえることができる集団・仲間であると思う。血が繋がっていない他人と出会って愛し合い、その人との間に命が宿り、両親の血が受け継がれた子どもがこの世に誕生する。そしてそれらは見えない絆という糸で繋がっている。その糸は、いつの間にかブチンと切れてしまう日がくることもある。その糸が切れないうち、私たちは日々支え合って、何気ない日常をおくる必要がある。

「ありがとう」と「ごめんなさい」たったの 5 文字と 6 文字だが、家族に素直に伝えられる人はそう多くいない。しかし、言葉にしてしっかり相手に伝える。これこそが生きていく上で大切であり、とても重要なことである。

そして人はたった 100 年ほどしか生きることが出来ないこの世に、何を目的として生まれてくるのか。生き物は、お互いが助け合い、幸せを分け与える力を一人ひとりが持ってこの世に生まれてくる。誰か一人でも困っている人がいたら手を差し伸べる。そして差し伸べてもらった人が、また新たに困っている人を見かけた際に手を差し伸べる。これを繰り返し行うことによって、この地球に一人で困っている人はいなくなる。笑顔を助け合いのループを起こすことが、我々人間が生まれ、自分たちの手で社会をつくり、一人ひとりが幸せに一生を終えるために行うべきことである。

人間はいつか死ぬ時が必ずくる。死は前触れもなく突然襲ってくるものだ。昨日まで一緒に笑い合っていた友人が、会った数時間後に亡くなることもある。死は誰にも予想することができない。そんな危険と隣り合わせの中、私たち生き物は毎日を必死に生きて、何気ない日々を当たり前で過ごすことが出来ていることに感謝する必要がある。そして悔いが残らない様、やりたいと思ったことはすぐに行動に移して、実践していくことが大切である。

周りの人や出会ったすべての人に感謝の気持ちを忘れずに、1 度きりの人生を精一杯楽しんで生きていこう。